

## ジャン＝ジョルジュ・ノヴェール著；森立子編著・訳 『ノヴェール「舞踊とバレエについての手紙」(1760年) 全訳と解説』

川野恵子

本書は、18世紀ヨーロッパにおける重要な舞踊運動「バレエ・ダクシオン（筋立てバレエ）」の代表者 J.G.ノヴェールの著書『舞踊とバレエについての手紙』（以下『手紙』と略）の「全訳」に始まり、続く「解説」においては1)ノヴェールの生涯、2)『手紙』の反響と複数の版、3)『手紙』の主要論点が収められ、最後にノヴェールと同時代の舞踊関係の人物及び同時代の社会的動向をまとめる「年表」が付けられる構成である。『手紙』には約半世紀前に出版された小倉重夫による翻訳があるが、すでに絶版であり、訳語の選択などに問題も指摘されていた。著者森立子による新訳は部分的に2003年に東京藝術大学に提出された博士論文の一部として提出されたため、閲覧することも可能であったが、本書の刊行によって、書簡形式で著された『手紙』を構成する15全ての手紙の正確な翻訳が広く一般に公開されることになった。

ノヴェールが生きた18世紀は舞踊によって劇を上演しようとする動向が汎ヨーロッパ的に流行した時代であり、これはのちに舞踊史においては「バレエ・ダクシオン」の時代と名付けられる。解説に記されている通り、『手紙』の主題はこの〈劇としてのバレエ〉である。ノヴェールによれば、当時のダンサーの踊りは跳躍や離れ業といったただ「目」を喜ばせるだけの技巧的なステップの披露に偏重しているため、その表現内容は「口上」によって常に説明される必要がある。それは「バレエ」という名にふさわしくなく、むしろバレエはプロタルコスの言う「言葉無き対話」として、悲劇に描かれる「情念」を身体を通じて表現しなくてはならない。そこでノヴェールは『手紙』のなかで、情念を感じる魂から生まれる舞踊を提案する。「魂」から生まれる身体の動きや表情は、単に観客の「目」を喜ばせるだけでなく、「魂」に語りかけることに成功する。その時バレエは口上の助けを借りずに舞踊だけで劇を上演することができる（主に第3、4の手紙）。こうしたノヴェールの主張から、身体を尽くして登場人物の情念を表現するという今日では広く受け入れられている舞踊のあり方は、実はこの時代に起源があることがわかる。そのため、いかに魂や情念と連携して踊るべきかを詳述するノヴェールの『手紙』には、今日においてもなお有効な舞踊論が随所に展開される。したがって本書刊行の第一の、そして最大の意義は、『風姿花伝』に比する西洋舞踊の古典書であり、バレエにかかわる全ての人の必読の書である『手紙』が広く届けられたことにある。上

述の通りノヴェールが重視するのは舞踊による情念表現であり、ダンサーはどのように決められたポジションから自身の踊りを解放すべきなのか、あるいは時には動きすぎることや制し、顔ないし視線だけで踊るべきなのかなど、優れた情念表現のための具体的な指針を本書から得ることができる。あるいは「解説」のとりわけ「パントミム」の項目においては、情念表現に卓越し、演劇のせりふに代わりうる舞踊表現が「パントミム」という術語にまとめられ、「マイム」と「パントミム」の違いなど、時代背景を含めて『手紙』に詳述される舞踊の情念表現論を簡潔に知ることができる。さらに、バレエ教師は頭や脚の動きを教えることができても、情念表現は教えられないといったバレエ教育法や、舞台を作る際には主要登場人物は一旦忘れることによって舞台全体が見えてくるといった舞台制作にかかわる指針など、本書を読み込めば読み込むほど、振付家やダンサー、舞踊研究者、舞踊愛好家にとって新たな発見があるはずである。

同時に、舞踊学に限らず、広く美学・芸術学を専門とする人にとって『手紙』へのアクセスが容易になった点も重要である。「解説」の一部に収められるノヴェールの生涯は、これまで出版された単著や論文、辞書項目から最新の情報を踏まえてまとめられたもので、読者はその生涯を日本語で簡便に読むことができる。そのなかで、実践家であったノヴェールが『手紙』という舞踊理論執筆を志すきっかけの一つとして、シェイクスピア演劇の高明な役者であったD・ギャリックの招聘に応じてイギリスに滞在し、ギャリックの豊富な蔵書に触れたことが指摘される。これはノヴェールの『手紙』の重要なコンテクストである。当時イギリスは思想的にも芸術学的にも、新しい潮流をリードする地であり、その影響は海を越えてフランスにも及んでいた。とりわけシェイクスピア演劇に描かれる登場人物の複雑な情念を身体によって自然に表現しようとするギャリックの演技は、デイドロをはじめとするフランスの思想家たちに身体と情念の関係をめぐる哲学的議論のインスピレーションを与えた。ノヴェールはそのギャリックとともに仕事をし、その蔵書に触れ、フランスの中ではギャリックにもっとも近い人物であったといえる。ノヴェールの理論には、フランスで培われてきた伝統的な理論の中にイギリスの新しい思潮の息吹が混在し、時に矛盾を帯びるその議論は、新旧が混じり合いながら転換していく

この時代の芸術論の様相を色濃く示し、当時の芸術全体を考える上で重要な考察点を含む。

「詩、絵画、舞踊は、とりもなおさず美しき自然の忠実な模倣にはほかなりませんし、またそうであるべきものです。(3頁)」冒頭に記されるこの有名な一文は、「美しい自然の模倣」というこの時代の重要で矛盾を孕んだ芸術的命題を明示する。この「模倣」が意味するところは、第一義的には、筋の模倣であり、『手紙』の主題〈劇としてのバレエ〉に直結する。その背景には古代ギリシャに遡る精神的技術と肉体的技術とを分ける技術の位階概念がある。この伝統的な技術概念において、絵画芸術を含め、造形芸術一般は肉体的技術としてヒエラルキーの下に位置付けられていた。しかしイタリア・ルネサンス以降、絵画は精神的技術にカテゴリ化された言語と数学を駆使する高級な技術であることが主張され、その結果、遠近法(数学)によって計算された画面の中で詩(言語)を模倣するルネサンス絵画が誕生する。精神的な技術としての絵画というテーマは17世紀に設立されたフランス王立絵画・彫刻アカデミーにおいても追求され、ここで詩を模倣する歴史画をもっとも高級な絵画ジャンルと位置付けるジャンルの位階概念が確立する。ノヴェールの『手紙』のなかでオペラ座が絵画アカデミーと同様に王立の機関でありながら、伝統的な舞踊ステップの型を繰り返すばかりで、肉体的な技術の次元にとどまっていることを批判しているのであり、その背景にある技術のヒエラルキー概念を見逃すべきではない。バレエの技術もそのヒエラルキーを上昇しなければならず、だからこそノヴェールは冒頭で舞踊を詩と絵画に並べるのであり、「歴史、神話、詩、絵画など、あらゆる他の芸術が、バレエが陥っている闇の中からバレエを引き出そうと手を差し伸べている」にもかかわらず、振付家はそれを無視していると非難する。

こうした詩としてのバレエという考えは、解説において指摘される通り、まさにアリストテレスが『詩学』に記した詩の制作方法——詩は行為／筋を模倣する——に準じて、バレエの制作方法を定義した前世紀のメネトリエに由来する伝統的なものである。ただしノヴェールはこれを「自然の模倣」とまとめる。なるほど行為の模倣と自然模倣の重なりは古代に遡る伝統的なものであり、この伝統の中で「自然(nature)」は事物の普遍的で変わらない「本性(nature)」を指すため、悲劇は偶然に満ちた人の行為そのものというより、その普遍的本性を捉え、模倣しなくてはならない。しかし、ノヴェールは自然模倣を主張し、自然を研究するなかで、自然の普遍性というより偶然性に満ちた多様性に開眼する。その契機はなにより「身体」にある。ノヴェールはとりわけ「第五の手紙」において、馬の「性質(nature)」を観察し、その馬の動きやすさをつづけた馬の調教師ブ

ルジュラの功績をたたえながら、ダンサーの「身体構造」の多様性の強調につなげる。馬も人間も各々異なる身体構造を持つことから、その調教に携わる人物は、常にその違いを認識するべきである。こうしたダンサーの身体の違い、個性への関心から、ノヴェールの議論の方向性はしばしば「模倣」の範囲を逸脱し、独創的／個性的表現を予感させる。無論ノヴェールの『手紙』の主題は、あくまでも登場人物の情念の表現であり、ダンサー自身の表現ではない。しかしノヴェールの視点は常にダンサーの身体の個性に据えられ、身体的個性に支えられた舞踊を重視した。この二重性は模倣から独創性／個性へと向かう近代の芸術観の移り変わりと同重なる。今日、変革期を迎えていた18世紀の芸術を語る際、絵画や音楽、あるいは演劇がまず俎上に載せられ、舞踊論の視点から語られることは少ないが、芸術表現における個性の問題はまさに身体を扱う舞踊論の問題であったといえる。こうした芸術学領域における舞踊論への言及の少なさを要因の一つは簡便に手に取れる舞踊論が少なかったことにあり、18世紀の芸術の転換を色濃く反映する本書の刊行は18世紀芸術研究の偏向を是正し、新たな視座を与えることにつながると予想される。同時に、ノヴェールの『手紙』に認められる模倣と個性の拮抗は、舞踊の根源的問題を捉えているとも考えられる。われわれは舞踊を見る時、たとえそれが何らかの役柄を模倣するものであっても、ダンサー個人の表現を見ている。だからこそ古典作品は今日においても再演されるのであり、舞踊芸術の一つの真理がここにある。『手紙』が今日においても色褪せないのは、こうした舞踊の普遍性に触れているからとも考えられる。

なお「解説」の第二の主題である『手紙』の反響と複数の版においては、18世紀同時代の『手紙』の翻訳に関する詳細な情報が収められるが、一方で20世紀以降の新訳の動向については言及がない。新訳を通じたノヴェールの舞踊論ルネサンスはここ数十年にわたる世界的な動向であり、2010年にはドイツ語の新訳(Henschel Verlag)が、2014年には18世紀に出版された英訳の校訂版(Pendragon Press)が出版されている。とりわけ後者は18世紀舞踊に関するシンポジウム*Oxford Dance Symposium*を20年以上前から主宰し、今日におけるノヴェール及び18世紀舞踊の再検討をリードしてきたオックスフォード大学のミカエル・バーデン教授が中心となって出版されたもので、本文を補足する詳細な註が『手紙』の度重なる改訂の異動情報やノヴェールの書誌情報とともに収められ、ノヴェール研究者にとっては必読の書である。こうした昨今の各国の翻訳・校訂状況に触れることは、本書の書誌情報をより完全なものにすると同時に世界的なノヴェール研究の流れの中に本書を位置付けることにもつながるのではないか。(道和書院、2022年11月刊行)